



未来に残したい、 私たちのプロジェクト。

日本じゅうで、未来に向けた新しい試みが増えています。企業、団体、自治体…、さまざまな立場での新たな挑戦や取り組みは、現時点だけの価値にとどまりません。それは、未来の地域社会を形つくる、かけがえのない「種」だと考えています。五〇年後、一〇〇年後の日本が、今よりもっと豊かであるために。その「種」を育てる人たちの夢や願いにふれて、その少し先の「未来」に思いを馳せてみませんか。

CONTENTS

110 | 町づくりの未来

津山市観光文化部観光・歴史まちづくり推進室

112 | 対談:「大人になる」ってどういうことだろう?

DECCI高等学院 × 華道家

114 | 企業プロジェクト

キミセ醤油株式会社 / コトセン株式会社 / 聖和株式会社
株式会社ダイテツ / 有限会社頼鉄工所



旧梶村家住宅
修復後イメージ

(上)「今後は地域ブランド力の向上はもちろん、地域経済へ貢献できれば」と明るい未来へ思いを馳せる、観光・歴史まちづくり推進室長・小林さん。(下)「暮らすように泊まる」をコンセプトに、客室とラウンジ棟として再生。

森蘭丸の弟・森忠政により建城された『津山城』を町のシンボルに、かつては出雲街道の要衝として栄えてきた歴史と文化が今もなお息づく津山市。みごとな石垣が残る『津山城』周辺には城東・城西それぞれ趣の違うふたつの重要伝統的建造物群保存地区や当時の面影を色濃く残す城下町の美しい町並みが広がり、ゆるりと歴史探訪を愉しめる。そんな美しい情景も、人の営みと手入れが途絶えれば建物は時代とともに朽ちるのみ。日本各地で人口や税収の減少、空き家増加といった問題の深刻化が懸念されているが、津山市も例外ではない。このまま建物を修繕・保存するための体力が弱まれば、後世において貴重な文化財が負債となりかねない。先人たちから受け継いだ誇りと伝統、そして文化を確実に次世代へと継承すべく、「二〇〇年後の未来に残す」ためのプロジェクトが立ち上がった。

中心に据え、歴史的建造物やその町並みを博物館めぐりのように愉しみつつ滞在を促すという「分散型ホテル」を目指している。リノベーションでは、老朽化による建物内部の構造的危険を排除し、伝統と革新が共存するデザインを採用。宿泊機能やレストラン機能を持たせることで地域全体をひとつのホテルに見立て、さまざまな体験を提供・運営する仕組みだ。観光資源として生まれ変わった歴史的建造物が人を呼び、地域が潤い、そしてその資金をもとに歴史的建造物を修繕する。この循環システムによって、起業や雇用創出にもつながるといふ。

歴史的建造物をただ「保存」するのではなく、経済の中心として「活用」するという未来を見据えた革新的な選択により、「価値を守りつつ、より多くの人に五感で津山の魅力を感じてほしい」という強い思いが垣間見えた。この「持続可能で豊かなまちづくり」はまだ始まったばかり。今後の展開にも注目したい。



「保存」から「活用」へ。
歴史的建造物の
物語を未来へと紡ぐ。



約1000本の桜が咲き誇る「鶴山公園」をはじめとした四季折々の美しい自然と歴史、文化が共存する町。



修復後イメージ

築100年以上の歴史を誇る「鶴山館」は、ゲストを温かく迎える「分散型ホテル」の玄関口に。フロント・ガイド機能のほか、カフェを設けることで、もてなしの心を表現。



修復後イメージ

長年「衆楽園」のシンボルとして市民に親しまれてきた、数寄屋風の造りが美しい「余芳閣」。歴史を感じさせる意匠はそのままに、快適な設備を充実させた特別な宿泊部屋へと変貌を遂げる。



『旧梶村家住宅』の現在の姿。歴史的建造物を後世へ残すと同時に、滞在型・付加価値型の観光モデルの確立によって集客を促す。

TOPICS

クラウドファンディングを開始

町と建造物をめぐる「分散型ホテル」開業を目指し、昨年よりクラウドファンディングを開始。支援者には特別な体験を中心とした返礼品を用意。なかには、祝砲や法螺貝の歓迎付き入場体験や豪華絢爛の晚餐、城下お練りなど、殿様の暮らしが体験できる面白い返礼品も。

津山市観光文化部
観光・歴史まちづくり推進室

[問合せ]

津山市山北520 ☎0868-32-2082

[公式HP]



「大人になる」をテーマに、異なる道を歩むふたりが対談。

華道家とDECCI高等学院創設者。まったく異なる道を選んでいるが、ともに「海外での放浪の旅」を経験したことのあるふたりによる対談。「型にはまるのが大人だ」という価値観を踏み越えた生き方を実践するふたりが、「大人になる」という誰もが一度はぶつかる問いに出した答えとは。



DECCI高等学院
佐々木慎太郎
校長

青山学院大学卒業後、2年間で世界33か国を回る放浪の旅を経験。帰国後、東京で編集者として勤務した後、家業の「季節の里」に入社し、ホテル業界へ。2008年に代表取締役となり、現在は複数展開する飲食店や宿泊施設の経営を行なう。

[公式HP]



華道家
萩原亮大

生命力あふれる力強い作品やダイナミックなライブステージを寺社仏閣や野外などさまざまな場で展開。「ロエベ」の旗艦店「カーサロエベ銀座店」の装花、カンヌ国際映画祭(CANNES GALA)で2年連続の公演など、活動の幅を世界にも広げている。

[公式HP]



「大人になる」って、
どういうことだろう?..

佐々木 「DECCI高等学院」に入
学する高校生向けに、本を出すこと
になりました。テーマは「大人になるた
めの本」。今日は「大人と子どもの違
い」について、亮大さんと話してみた
いんだけど、どうかな?

萩原 いいですね。ただ、そもそも
「大人になりたいのか?」って前提の
話から始めてもいい気がします。

佐々木 なるほど。

萩原 まずはシンプルに、大人のポジ
ティブな点と、子どものポジティブな
点を挙げてみるのはどうですか?

佐々木 じゃあ、ChatGPTに聞
いてみましょうか。

(AIの回答を見て)

萩原 早いですね。でも、こうやって
見ると、大人になって悪いことって、
実はそんなに多くないですよ。

佐々木 亮大くんが仕事を嫌いじゃな
いから、そう感じるのかもしれないで
すね。礼儀もしっかりしてるし、人付
き合いも上手だし。

萩原 それはファッションショーの演
出家アシスタント時代に鍛えられま
したね。当時のアパレル業界は本当
に大変で、体育会系的な側面もまだ

残っていました。

佐々木 それで大人になった?

萩原 おかげで礼儀は身についたと思
います(笑)。

佐々木 今回の本で書いたのは、「こ
う考えると周りから「大人」に見られ
やすい」という話です。キーワードは
「利他」。

多くの人は、世界をよくしたい、幸せ
になりたいと思っている。でも、その
対象が「自分だけ」だと、自分勝手に
見える。「自分と仲間」まで広げると、
身近な人からはいい人だと思われる。
でも、社会全体から見ると評価は分か
れる。

自然や社会全体まで含めて考えられる
ようになると、周りから「大人だな」
と感じてもらいやすいんじゃないかと
思っています。

萩原 わかります。僕らが好きな仲
間って、口に出すと恥ずかしいけど、
どこかピュアな部分がありますよね。

佐々木 そうだね。自分たちでいうと、
ちよつと気持ち悪いですけど(笑)。

萩原 でも、そのピュアさがちゃんと
残ってれば、大人になることに不便
はないと思うんです。大人になること
への抵抗って、そこじゃないですか?

佐々木 確かに。

萩原 好きな仕事をしていて、愉しそ
うに働いている大人は、やっぱり
「カッコいい」ですよ。

DECCI高等学院とは?

「教育で日本の伝統を守りたい」がコンセプトの通信制高校サポート校。「伝統×デジタル」の視点を持って、世界で活躍できる伝統産業の担い手を育成。「新時代学習」では、SNS・canva・デザインなどのデジタル教養と、礼儀作法・ビジネス習慣などの基礎教養を、また1年時の体験学習と2~3年時のインターン学習では、伝統産業の現場で知識や技術を学べる。

教科指導

同校が学習指導

実務指導

企業が実務指導

提携通信高校での
単位取得

インターン受け入れ
ノウハウの提供

インターン研修しながら
高校卒業できる



4月発売予定

「大人とは何か?」に
真正面から向き合う一冊。
迷い、遠回りし、失敗してきた佐々
木校長が、仕事、お金、旅、恋愛、
学び、死について語る。若者への
人生の教科書でありながら、大人
の読者には「あなたは本当に大人
として生きているか」と問いかける。

1. 自社で国産丸大豆を挽き割る工程から「醤油造り」が始まる。脱脂加工大豆に比べてコストもかかるが、その手間暇は惜しまない。2. 発酵・熟成を終えた諸味をいねいにご布で包み、積み重ねて圧搾。酵母が生きたままの「生揚げ醤油」が搾られる。3. 昔ながらの味わいを守り続けている「まろやか醤油」をはじめ、岡山県産黒大豆が主原料の「五穀まろやか酢」も人気商品だ。



永原社長(中央)と製造社員。写真後方の円盤式製麹装置で3日かけて発酵させたものが、「醤油麹」。「8200kgの麹はここから何カ月にもわたる「諸味熟成」の旅に出る。この最初の麹造りの工程が一番大事です」と永原社長は話す。

しょうゆ
キミセ醤油株式会社

[問合せ]

岡山市南区妹尾217 ☎086-282-0275

[公式HP]



手間暇を惜しまず、「麹造り」から自社で二貫生産。
江戸末期の一八六六年より、一六〇年にわたる歴史をもつ「キミセ醤油」。本醸造・自社一貫生産にこだわり、手間暇かけた「醤油造り」を続けるメーカーだ。今では県内でも自社で麹を造るメーカーはほとんど残っていないが、同社では希少な国産丸大豆を挽き、蒸して麹を造るところから手がける。「うちは材料も工程もすべて、社員全員が胸を張ってお客さまに説明できるもの。隠すところは何もないですよ」と、五代目社長を務める永原琢朗さんは語る。

屋号の「キミセ」は「木の店」から来ており、創業当初は材木商だったという。二代目が「醤油醸造」へと事業を転換し、戦中戦後を耐え抜いた三代目を経て、現在の会社の礎を築いたのは四代目(現会長)の永原國夫氏である。國夫氏は、六〇年代当時の主流で

あったアミノ酸液で造る製造法をやめ、麹を使う本醸造へと回帰。一軒一軒、一般家庭を訪ね歩いて魅力を伝える営業手法で、遠く県外にまで販路を拡大した。

時代も国境も超えて伝わる、ものづくりへの真摯な姿勢。

その後、時代とともに消費者の生活スタイルも変化したが、今でも基本は昔ながらの戸別配達と、直営店「五穀蔵」による「顔の見える」直接販売だ。永原社長は「お客さまの声を直接聞くというのは、造り手にとって大切なこと。営業社員の日報を読んでいると、次にやるべきことが自然と見えてくるんです」と、その意義を話す。加えて今は、ネット販売も拡大。大々的な宣伝はしていないにも関わらず、注文は全国各地から入ってくるという。

また最近では、台湾やヨーロッパなどへの輸出も始めている。社長も社員も派手なアピールは得意でないというが、誠実なものづくりを貫くという事実が何よりの説得力となり、価値は確実に伝わっている。「うちの強みは、とにかくまじめに。それだけですから」と永原社長は語る。この言葉には奥に息づく、確かな誇りを感じる。目まぐるしく移り変わる時代のなかで、その芯は揺るぎない。



MIRAI PROJECT

01

伝統は革新の連続。
醸造への想いが、
一六〇年の歴史を貫く。

国産丸大豆、小麦、きび、あわ、米の五穀で「醤油麹」を造る。種麹菌で発酵させ、菌糸が張った状態を確認し、塩水と仕込む。



本社併設の「幻想もろみ蔵」では、500mlのしょうゆ約100万本の諸味を発酵し、備前焼の大甕でクラシック音楽を聴かせ調熟している。

1.「休憩時間はしっかり寛いでほしい」と、カフェを思わせるオープンスペースも。2.新鮮なサラダやフルーツも揃う「OFFICE DE YASAI」を導入。ひとつ100円から購入でき、社員の「食」をサポート。3.昨年実施した社員旅行には、ほぼ全員が参加。写真で着用しているTシャツには、これまでの50年とこれからの「コトセン」をモチーフにしたイラストをプリント。



「工場は機械が設置されているため全面リニューアルは難しい。以前、工場内にあった事務所のスペースを利用して少しずつ改善し、働く環境を整えていきたい」と渡邊社長。

コトセン株式会社

【問合せ】

倉敷市児島下の町5-1-15 ☎086-472-8100

【公式HP】



独自の技術を磨き、 環境にも配慮。

一九七五年創業の「コトセン」は、全国的にも数少ないデニム専門の整理加工場。「織られたままではねじれたり縮んだりするデニム生地にはさまざまな加工を施して、それらを予防したり、見た目や手触りといった風合いを調整するのが私たちの仕事」と渡邊将史社長。生地に光沢を与えたり、新しい生地をより古く見せたりする特殊な加工を開発・特許取得するなど、「ほかでは真似できない、ここだけの技術」で付加価値も高めてきた。また、安全性と環境負荷に配慮した（世界レベルの基準）「倉敷染」の認定を受け、「クラブウ」のアップサイクルシステム「ループラス」で廃材を有効活用するなど、次世代を見据えた取り組みも。いっぽうで、「ものづくりに打ち込める職場環境」を目指し、二〇二四年に完成させた新社屋には、食事にも使えるオー

ブンスペースを設け、手軽に利用できるレトルト食品やスイーツなども常備する。さらに、五〇周年を迎えた今年には、これまでの感謝と「新たなステージをと共に歩んでほしい」との思いを込め、社員旅行を実施。全室スイートルームの高級旅館や、五つ星ホテルで英気を養ったとか。

誇りを持って働ける、
整理加工場を目指す。

「世界的なブランドにも携わっていますが、整理加工という仕事は一般の方たちには見えません。それを可視化し、この仕事に就く人が誇りを持って働ける、魅力的な産業にしていきたいのがこのからの目標。その布石となっているのが、「倉敷染」のデニムを用い、ユニフォームやグッズをフルオーダーで作る「Leader（リーダー）」も。もとは「社員に自分たちが加工したものと身近にふれ合ってほしい」と自社の制服を企画したが、外部からの依頼が相次ぎ、企業向けにブランド化。

「私たちのSDGsや未来への思いを届けるとともに、異業種の方とつながり、輪を広げるツールにもなっています」。そう話す渡邊社長は、「リーダー」やアップサイクルしたデニムを用いた「一般向けのオリジナル商品も発信していきたい」と意欲を見せた。



MIRAI PROJECT

02

可視化・周知することによって、
デニムの整理加工を
魅力ある産業に。



さまざまな加工を施したデニムの原反は、すみからすみまで目視と機械で細やかにチェック。クリアしたものがだけ出荷される。

デニムの再生素材を用いた特製サインの前に集う社員たちは、わきあいあいとした雰囲気。その明るさは同社の未来を示しているよう。



1.製品の受け入れから保管、発送までを一貫して行なうため、約300m²の自社倉庫を保有。温度管理や清掃が行き届いた環境で保管。2.補修によって不良品を市場に出せる品質にするだけでなく、個人名刺繡やボタン付けなど、手作業だからこそ対応可能な新たな価値を創出。3.移送中についたしわやプレスミスを整えるアイロン作業。



「私たちにとっては数百本のなかの1本でも、それを手に取られるお客さまにとっては唯一の1本ということをつねに念頭において向き合っています」と林社長。



MIRAI PROJECT
03
「わが子の人生に寄り添う一着か」。

検品の基準は、

確かな技術と誠実な姿勢で信頼を得ている同社。年間を通し、おもに「菅公学生服」から150から200万点の検品や二次加工を任されている。

せいわ
聖和株式会社

[問合せ]

倉敷市玉島男崎1097-28 ☎086-528-0040

[公式HP]



数値化できない品質まで見極め、信頼を得る。

二〇年以上にわたって大手学生服メーカー「菅公学生服」を中心に、カジュアル服の検品も担ってきた「聖和」の林桂子社長は、こう話す。「検品では、キズや汚れ、仕様違いなどの目視確認にとどまらず、縫製の強度や生地繊維目、風合いといった、数値化できない品質にも目を配っています」。その徹底した仕事ぶりは、検品スタッフのほぼ全員が母であるゆえ。「わが子にこの学生服を着せたいか」という独自の基準あつてのこと。さらに、「清潔で整った環境は、人の集中力と配慮を高める」ことから、清掃や整理整頓を心がけた結果、関係者から「食品工場に匹敵するほど清潔」と評価されることも。取引先からの信頼につながる社員の誠実な仕事ぶりを知る林社長は、朝のあいさつの声のトーンや目の動きからコンディションを察知し、体調に

合わせて持ち場を変えるなど、「気持よく仕事ができる、居心地のよい職場」づくりにも配慮している。

ユニフォームの検品で、新たな二歩を踏み出す。

社員の意思を尊重する同社では、「検品後に不良を修正してみたい」との声から補修を、「検品後から入学式までの間に出来ることをしてみたい」との要望から、スラックスの裾上げや個人名刺繡などの二次加工を二〇二〇年から手がけるように。検品で見つかる不良の多くは補修が可能のため、廃棄や返品は減ったという。新たなことに挑戦し、それを実現するために技術を磨き、着実に成長してきた同社。二〇二五年には、事業拡大を目指して、事務服をはじめとするユニフォームの検品・補修・仕上げを新たな柱と定めた。「全社員が細部まで目の行き届いた質の高い仕事を行なえるので、学生服に近い特性を持つユニフォームでもお客さまに満足してもらえると考えました。これまでの応用なので社員の負担は少なく、仕事にも心にも余裕が生まれるはず」。そう話す林社長は、「会社のユニフォームをまとう時間は一日の三分の一。これからは『家族の日常に寄り添う一着か』も基準です」と、優しい笑顔を浮かべた。



同社では事務服をはじめとするユニフォームを「大人の制服」と呼ぶ。昨年は初年度ながら、女性の事務服4万点の検品と仕上げを担った。

1.「グランドアートウォール」は、特殊発泡パネル、特殊メッシュ、ベースコート、防水、仕上げ材の5層構造。弾性に優れ、内部に鉄芯が入っているため倒れにくい。2.短い工期と高いデザイン性に定評がある。3.岡山市郊外に建つ同社。金属板の強度を高め、板厚を薄くできるZリブ工法の設備や、フロンガスをリサイクルするための機械など、時流に合わせて進化。



牛窓海水浴場近くに昨年2月にオープンしたカフェ&バー「USHIMADO TERRACE」の外壁として「グランドアートウォール」を設置。「夏の工事だったのとにかく暑かったが、2日間で完了したので助かった」と藤井社長。

株式会社ダイテツ

[問合せ]

岡山市南区浦安西町14-28 ☎086-263-6868

[公式HP]



確かな技術と実績で、
大型施設も多数手がける。

一九九九年の創業以来、多様なダクト製作・施工とエアコン設置・冷媒配管工事で、オフィスや公共施設、大型商業施設などに快適な空気をもたらしてきた「ダイテツ」。「ダクトには、空調設備と各空間をつなぐ空調ダクトや、工場や製造現場の熱を逃す排熱ダクト、厨房の煙や熱を逃し、新鮮な空気を取り入れる吸排気ダクトなどいろいろな種類があります」。そう話す藤井社長が率いる同社は、長年培ってきた確かな技術が評価され、岡山市庁舎や「岡山芸術創造劇場ハレノワ」、イオンモール岡山」なども手がけてきた。「多くの人が利用する施設に携われることは誇らしい」と藤井社長。さらに、消費型社会から循環型社会への移行に対応すべく、環境に配慮した工法やフロンガスのリサイクルなどにも力を注ぐ。「それぞれの空間で働く人や集う

人により快適な空気を届け、人と自然が共生できる社会実現のために、今後も創意工夫を重ねていきたい」と、現状に甘んじない姿勢を見せた。

「特殊発泡素材の扉で、
地域に貢献したい」。

「時代のニーズに合わせて、新たなことに挑戦したい」。藤井社長のそんな思いから立ち上げた事業が「Grand Art Wall（グランドアートウォール）」。特殊発泡素材の外構扉で、重量の軽さから最大三メートルの高さを実現するほか、カーブをつけたり好きな位置に小窓を設けたりと自由度が高く、施工期間が最短二日と極めて短いのが特長だ。「発泡スチロールはパキッと割れるというイメージですが、『グランドアートウォール』は第三者機関による耐風圧強度検証で最大瞬間風速六〇メートル、耐震強度検証で最大震度七以上という結果を得ています。万が一、地震で倒壊したとしても、軽量のため巻き込まれた人が重症を負うことはありません」。その特性から、高梁市で来年予定されている橋桁工事で、通行人を守る防壁として採用が決定しているという。「安全や安心をお届けできるこの外構扉で、地域に貢献していきたい」と、藤井社長は真摯な表情を浮かべた。

「グランドアートウォール」の重量は、コンクリートブロックの約10分の1。女性スタッフも扱いやすく、作業効率も上がるという。



快適な空間を支える
『ダイテツ』の新たな挑戦は
理想の空間づくり。



プラズマという機械でカットされた金属板は、経験豊富な職人の手によってそれぞれの現場に応じたダクトへと仕上げられる。

1. 浸せき式多段ポンプの断面。鉄とステンレスの圧接素材を加工する技術は同社ならではの。この組み立てられたポンプは、先端半導体製造に不可欠な液温調節装置「精密チャ―」として組み込まれている。 2. 工場内にあった事務所が手狭になり、2023年に完成させた新社屋。 3. 北九州で技術を学んだ後、帰郷して同社を創業した頼本太さん。



顧客の要望に合わせて作る精密シャフト。太さや長さ、形、材質などが異なるシャフトを、毎月200種類以上、年間では1000種類以上製造している。手前の円柱形の部品は、精密嵌合部品のカラー。

よりてっこうしょ
有限会社頼鉄工所

【問合せ】

岡山市中区乙多見393-3 ☎086-279-1521

【公式HP】



焼け跡から立ち上がり、
技術と創意工夫で成長。

一九二六年、機械メーカーとして創業した「頼鉄工所」。現在は、さまざまな機械に用いられる精密シャフト製作と研磨加工の精度の高さや、顧客の要望に応えるための創意工夫、それを支える技術力で、多くの機械メーカーから信頼を勝ち取っている。しかし、創業からの一〇〇年を振り返ると、危機的状況に陥ったこともあったという。「最も大きな危機は、一九四五年の岡山空襲。からも職人たちが無事だったので、再興できたと思っています」と、専務取締役の頼伸治さん。戦後、国をあげての食料増産に向けた農業機械の部品製造で再始動した同社は、その後、船舶や工作機械の部品を経て、一九八二年からモーターの軸を手がけるように。これが現在の精密シャフト製作につながっていく。頼専務曰く、「創業時から受け継ぐ、意欲的に新し

い技術を取り込み、試行錯誤でニーズに応える姿勢で、着実に歩んできた結果です」。

同社の製品は、新幹線や東京スカイツリーにも。

曲がりを極力抑えながら一〇〇分の一ミリ単位で仕上研削することが難しい、複合素材圧接シャフトの量産を実現するといった、知識と柔軟な思考、技術の確かさを証明してきた同社。二〇〇一年には自社でホームページを立ち上げ、顧客開拓するなかで、新幹線にも組み込まれる軸や東京スカイツリーにも使用されているマグネットポンプシャフトの製作へと進化。「シャフトを製作する時に、まず声がかかるような会社を目指したい」と、頼専務は意欲を見せる。また、岡山県が設立した水素関連技術や半導体関連のコンソーシアムにも参加。そして、まだ実験段階の高圧水素コンプレッサーの部品をはじめ、日々加工技術の研究開発を重ねながら、関連企業とも活発に交流している。「私たち三代目とともに、すでに次の世代が事業承継に向け、がんばっています。一〇〇年先も、目立たずとも必ず社会に必要とされる、いわば『真昼の星』として未来につないでもらいたい」。頼専務は早くも四代目の活躍に期待を寄せている。



05 「精密シャフト製作なら
100年にも負けな



精度を重視する会社では、手作業でシャフトの外径を計測し、完成後は光学機器で計測。計測器の1目盛は1000分の1mm。



20歳から59歳まで、年齢も性別も国籍もさまざまな社員たち。ベトナム人を受け入れたことで、平均年齢がぐんと若返ったのだそう。